

人権と尊厳

園長 児嶋 草次郎

1月25日(土)、静養館前の十次梅がようやく一輪花を開いてくれました。例年一番最初に開花する方舟館の梅の木は、まだ数日かかりそうです。(ちなみに、方舟館前の梅の開花に気付いたのは2月3日でした)。早い年は12月暮れから、遅くても1月初旬には咲き始めるのに、今年はかなり遅いという印象です。晩秋があたたかかったので、梅の木も花の準備が遅れたのでしょう。

同じ冬の花である日本スイセンは、今が盛りです。今年はどういうわけか、花をたくさんつけてくれて、馥郁(ふくいく)たる香りを、かすかに園庭に漂わせています。途中で折れた花を何本か切りとり、園長室に飾って、その可憐な花の生命力からエネルギーをいただいています。

さて今回は「人権と尊厳」という題にしました。石井十次の時代は、「人権」という言葉さえなく、子供たちを救済する際にその根拠となる法律もなく、何を決断の支えとしていたのか、何を行動の指針としていたのか。考えさせられる機会が多くなって来たのです。石井十次の場合は、キリスト教的な価値観を基盤とした、人間としての「尊厳」を大切にしよう、守ろうとする思いだろうと感じて来ました。

ところが現代は「人権」の時代。尊厳という言葉はあまり使われなくなった気がします。人権が一人歩きし始めており、尊厳が置いてきぼりになりつつある、そんな気さえしてきます。

ロシアのプーチンが隣国のウクライナに侵略して3年になりますが、彼は自分に都合のよい法律を次々に作って、その侵略を正当化して来ています。彼にとっては、この戦争は、ロシア国民そして兄弟国家であるウクライナ国民の人権を欧米から守るための戦いであるのです。

なぜこんなことになってしまったのだろう。ソ連が崩壊して、アメリカが軍事、経済、価値観において常に世界を引っ張って来ました。国連も、その英語圏の価値観でグローバル化をアピールして来たと言ってよいでしょう。つまり、世界は一つという構想のもとに、グローバリゼーションが席卷して来た。しかし、アメリカの衰えが見られるようになり、その隙をねらって独自の価値観をアピールし始めているのがロシアや中国と言ってよいのではないのでしょうか。

世界の国々は、それぞれに独自の歴史や生活文化を持ち、それぞれに誇り高き精神文化を守って来ています。先進国が世界は一つだ、グローバリゼーションだと言っても、周辺国は自分達のアイデンティティまで投げ出す気持ちにはなれないでしょう。経済だけで国が成り立っているわけではありません。グローバルサウスと呼ばれる国々の存在感も徐々に高まって来ています。

我が国は、敗戦後80年間、ひたすらアメリカに守られながら、経済復興・成長と平和を追求して来ています。常にアメリカの価値観を追い求め、世界標準に足並みをそろえようとして来たわけです。生活も豊かになり人権も色んな面で守られるようになって来ています。

しかし、今世界が混迷の時代に突入しようとする時、今までの流れに身をまかせてよいとは思えません。世界の力関係が今後変わっていくとなると、国としての運命も今後変わっていく可能性があります。

私たちは福祉の世界で生かされている人間ですので、国レベルの仕事はできませんが、地域の状況

をしっかりと見つめることはできます。グローバル化の流れの中の私たちの社会的養育の範ちゅうにおいて、すごく気になっていることがあります。今までこの友愛通信において何度も書かせていただきました。

平成 28 年度、改正児童福祉法の中に、政府は、わざわざ「家庭優先の原則」を入れました。そもそも児童福祉法は家庭の中で子供の尊厳が守れない現実があるからできたものでしょう。家庭で尊厳が守られないのであれば、代って養育する場が必要です。法律でその場として作ったのが乳児院であり児童養護施設です。法律に明記されたわけであり、子供たちは権利として施設生活を保障されることになりました。「家庭優先の原則」なんて、わざわざ書かなくても、暗黙の了解事項であったわけです。どこかの独裁国家じゃあるまいし、家庭において幸せに生活できている子供をさらって、強引に施設に入れるなんてことがあるはずない。

では、なぜこの度そのような言葉を法律の中に入れたのか。私に言わせれば、里親委託率を世界標準に持っていくための姑息な手段です。すでに内容的には崩壊しているアメリカ等の里親委託率を強引に日本にも導入しようとしている。法律で決まったことは人権となります。次にこれから予想されることです。水戸黄門さんの印籠じゃないけど、人権を守ろうとする措置権を振り回して、養育環境として不適切な家庭に強引に家庭復帰させたり、施設入所させないために、いつまでも一時保護所にとどめ置いたりする可能性が充分にあります。里親制度そのものを私は否定するわけではありませんが、里親さんの支援体制をしっかり作らないままに数字合わせをしようとするれば、日本の里親制度そのものが崩壊していく可能性もあります。

私が言いたいことは、子供の人権、行政の措置権の名のもとに、子供の尊厳が犯される状況が生まれる可能性が今後あり得るということです。我が国は、欧米のように移民社会、他民族社会ではありません。地域地域にはしっかり日本の伝統的な子育て文化・教育文化が根付いています。それらの日本民族としての社会的養育を考えるべきだと思います。

そのようなことをアレコレ考えていた 1 月 12 日（日）から 13 日（月）にかけて、友愛園の中・高校生たちは、熊本に一泊旅行に行つて来ました。名付けて「田原坂・小楠旅行」。昔は田原坂まで足を延ばすことはありませんでしたが、この 10 年ほどは行くようにしています。

1 月 12 日（日）朝 7 時 16 分。職員と子供計 32 名を乗せた貸切バスは園を出発しました。私はいつものように出発するとすぐ、田原坂行きについて次のように説明しました。

石井十次のお父さんの万吉氏が、あの西南戦争（明治 10 年）で一番の激戦地だった田原坂の戦に西郷側の高鍋隊として参戦している。それから 1 年後、十次少年が高鍋島田小学校を卒業した時（明治 11 年 13 歳）、お父さんは十次少年を九州旅行に行かせている。田原坂の戦い跡を見ること。ここを見て長崎と鹿児島に寄って帰っている。田原坂で何を学ばせたかったのか。

今回のこの旅行のために用意された資料には、『死闘であった。17 昼夜戦った』と書いてある。石井のお父さん万吉氏は、そこで地獄を見たのだと思う。その戦いに敗れて、万吉氏は戦線から離脱して高鍋に帰って来ている。なぜか。この戦いには大義名分がないと感じたのだと思う。

西郷隆盛も積極的に戦ったわけではない。私学校を作り、吉野村の開墾事業をやりながら別の未来を構想していた。国政に不信感を抱く若者たちが暴発的におこした戦争だった。西郷さんも引けなくなったのだと思う。万吉氏も戦っているうちにそのことに気付いてしまったのだと思う。

今もロシアとウクライナとが戦争をしているけど、あれはプーチンがやり始めた戦争。大義名分を色々言っているけど、他から見たら信じられるものではない。すでに 20 万人くらいの人々の命を奪っている。戦争は一度やり始めたらなかなか止められない。万吉氏も戦いから抜け出すのにすごく勇

気がいったと思う。

この田原坂の戦いが終って約1年後、十次少年に見に行つて来いと命じた。なぜだろう。おそらく田畑は荒れはて、町や村は焼け野が原。そこらあたり中、人骨も散らばつていたと思う。ある本を読むと、死んだ兵士から身包みはがしてすべてを盗んだり、人肉まで食べるようなヤカラがいたそうです。戦争というのは人間を獣（けだもの）以上の悪魔にしてしまうようです。

「戦争はすべきではない」という感性を身につけさせようとしたのだと思う。その時十次少年が何を感じたかは記録上は分からない。

次の年、明治12年（14歳）、十次少年は、東京の「攻玉社」という、特に海軍軍人を養成する学校に入学しています。西郷さんのように軍人になって、世のために働きたいという十次少年の志を、田原坂体験は変えることができなかつたようにも見える。しかし、1年足らずで退学して帰郷している。一応脚気（かっけ）という病気にかかったからということになっている。多分私は、これは作り話で、父親の教育が入学して生きて来たのだらうと思う。

つまり、やはり人間という尊厳を犯してしまう戦争はダメだ、という感性。脚気は今ではビタミンB1不足の病気だとわかっている。当時未知の病で、今のコロナみたいにすごく流行していたようだ。寮生活で同じメシを食べているのだから、十次少年だけが脚気になるなんてあまり考えられない。

地域の人達に「バンザイ、バンザイ」と送り出されて入学して来ているのに、まさか今さら軍人になりたくないなんて言えない。「脚気です。」と言えど皆を納得させることが出来たのだと思う。

みんなが今回、田原坂を見て学ぶべきことは何か。やはり戦争というものの非人道性を感覚として身につけることだと思う。十次少年のこのような体験が、その後の生き方の方向性を決めたとし、基盤にもなっている。しっかり体で感じ取ってほしい。

今回の旅行のコースは、高千穂回りです。高速道で延岡まで北上し、そこから一路高千穂・日之影へ。阿蘇の外輪山には薄く雪が見られました。10時半頃、阿蘇神社にお参りし、復興された阿蘇大橋をながめ、途中レストランで昼食を取って、「田原坂西南戦争資料館」に着いたのは、午後1時半前後でした。

おそらく元学校の先生であろう方が案内をしてくださいました。このような資料館を子供たちと一緒に訪れていつも感じるのですが、最初の5分間が勝負です。年表を説明するような話から入ると、子供たちにとっては学校の授業と一緒に集中力を切らしてしまいます。しかし、帰ってから書いた感想文を読むと、それぞれにしっかり受け止めていました。

「私は、今回の一泊旅行で平和について考え、平和の大切さを学び感じる事ができました。石井十次先生も田原坂を訪れたと聞き、同じように感じられたのではないかと思います。

今後、戦争が起きる世界がなくなるように日々願って生活していきたいです。また、安心して生活できていることに感謝し、知らないことも積極的に学んでいきたいと思います。」（みさき 高3）

「田原坂の戦いを知れば知るほど、殺し合いでいくつもの尊い命がなくなってしまう戦争は絶対してはいけない、と強く思いました。」（まなか 中2）

「家族や身内どうしても戦っていたと聞いて心が傷みました。資料館の近くの慰霊塔では、みんな写真も撮りましたが、その後にはこの戦いで亡くなったたくさんの人の名前がありました。」（ことみ 中2）

「約7ヶ月の戦いで、熊本・大分・宮崎・鹿児島九州四県にまたがって約1万4千人の若者たちが命を落とした。むごく、激しい戦いだつた。

これからも、国内、外国とも戦争をしない日本でありたいと感じました。」（なな 中2）

私は最後にガイドの人に2点、質問してみました。話題に出すのもおぞましいのですが、人間として最悪の尊厳蹂躪（じゅうりん）だと思いますので、今回はあえて、子供たちの前で発言しました。ガイドは、人肉食について「二度ほど禁止令が出された。」と答えられました。

もう一つ死体の遺骨の収集です。政府軍の死者は丁重に葬られたのに、賊軍（ぞくぐん）である薩軍の死者は放置されることが多く、その遺骨の正式な収集・吊いは2、3年後ということでした。高鍋隊だけでも、総計700人ほどの人が参戦し、戦死者は78名です。戦後に遺骨収集団みたいなものが組織されたようですし、十次少年は、その一行に同行したとも考えられます。

この日は熊本市内のホテルで宿泊しました。みんな温泉でゆっくり心身をいやすことができました。

1月13日（月）、朝8時半すぎにホテルを出発し、まず震災後まだ修復中の熊本城の見学。その後、グループごとに市内で買物・昼食。12時半に集合し、もう一つの目的地「横井小楠記念館」へ。熊本地震で崩壊し、一時期は閉館していましたが、今回は、私塾跡「四時軒」もりっぱに復元されていました。ここには私自身は何度も訪れていますが、中学生たちは初めて、高校生たちは2回目です。

横井小楠についての有名なエピソードが二つ。

- ・坂本龍馬がこの「四時軒」の小楠を3度訪問しているということ。
- ・勝海舟が「オレは今まで恐ろしいものを二人見た。一人は横井小楠、もう一人は西郷隆盛である」と言ったということ。

互いに小楠と龍馬になったつもりになって、四時軒の畳の上の座卓に向かい合って正座し、握手をするというのが、今までの私たちの楽しみであり、今回も何人かの子供と向かい合いました。このような体験は、きっと思い出として記憶に残ることでしょう。思い出しながら、器の大きな視野の広い人間になってほしいというのが私の願いです。

「横井小楠のように多くの人に影響を与えられるような立派な人になりたいと思います。」（なつこ 高3）

「川が見え、カモが泳ぎ、四季の花が庭で咲くのを小楠も見たのだろうなと思いました。」（S 中2）

「学問を大切にし、その時代の人が見つからない考えを訴え、色んな人に影響を与えた日本の文化に重要な役割をした人物だということを学ぶことができ良かったです。」（なな 中2）

「横井小楠は、広い知識と視野で先の日本のことを見すえた考えを持っていたので、日本中の志士たちに大きな影響を与えていました。また『藩や身分をこえた議論』をととても重視していました。今の私たちも立場にとらわれずに自分の意見をどんどん人と交わしお互いを認め合うことが大事だと感じました。」（まなか 中2）

四時軒前ののどかな田園風景と遠くの阿蘇の外輪山を見つめながら、私たちは午後1時40分頃、帰園に向けてバスに乗りこみました。石井万吉氏と同じような思いで、私はこの旅行を主催しているのですが、子供たちはそれぞれに感性で受け止めてくれたように思います。これからの人生において、壁を乗り越える糧（かて）にしてくれることでしょう。

ここで最初の話にもどります。言いたいことは、子供たちは、施設でもりっぱに育ってくれているということ。アメリカナイズされた施設否定論者たちとは、周辺の市町村と一体となって、今後も戦っていかねばならないと、あらためて思っています。ちなみに、里親委託率論議については、国連からの強い勧告があってから始まったとか。価値のグローバル化の中で、「皇室典範」をも男女差別と決めつける（2024.10.29）ところが国連です。先が思いやられます。今春友愛園より4人が大学に進学しますが、これらの課題については、彼らに託すことにしましょう。

